

## 2008年度 日本リモートセンシング学会論文奨励賞 受賞の喜び

このたび、日本リモートセンシング学会論文奨励賞を受賞し大変光栄に思っております。本務である大学での教育活動の次に大切と考えている学術的な活動での評価を頂き大変感動いたしましたし、一層身の引き締まる思いです。

本論文は、私が東京大学大学院博士課程1年在籍中の2001年に、西シベリア湿原にて行ったメタン・二酸化炭素ガス測定の調査が元になっています。共同著者である中野智子先生(現 中央大学 准教授)の現地調査に同行させていただく形で、当時私の所属していた東大生研の助手であった越智士郎先生(現 近畿大学 准教授)とともに8月の3週間、国立環境研究所が定点観測を行うPlotnikovo村(北緯56度、東経85度)周辺にて調査を行いました。世界最大の湿地である西シベリア湿原は、第四期以降に形成された泥炭で地表が覆われており、およそ半分が永久凍土地帯です。湿地とともに生態系を形成する森林が火災などによって攪乱を受けると、大量のメタンや二酸化炭素が放出されます。本論文は、衛星画像から植生・土壌・水のパラメータを同時計測することにより、火災後の森林の回復具合を調べたものです。

西シベリアでの現地調査実施は、東大生研で毎年3月に行われている生研フォーラムにて、修士論文で行った西シベリア湿原の研究内容について中野先生とお話ししたのがきっかけでした。懇親会のときに中野先生の西シベリア現地調査に同行したいとぶしつけに申し出たにもかかわらず快諾され、当時の指導教官であった安岡善文先生(現 国立環境研究所 理事)もその場でOKサインを出してくれました(と記憶しています)。そして8月には本当にシベリアに行くことになりました。今考えると自分でも恐ろしいばかりの勢いです。

日本から飛行機を乗り継いで、モスクワ、ノボシビルスク、さらに車で走り続けて途中トムスクで3週間分の食料、水などを買い込み、日本出発から30時間かけてようやくPlotnikovoにたどり着きました。日の高いうちに行うガス測定とバイオマス測定調査は意外にも暑さとの戦いであり、水がたっぷりたまった泥炭では足を取られ、森林では蚊よけネットをしても防ぎきれないくらい蚊とアブに刺されながらの作業でした。夜は、村の小学校の1室を借りて寝泊まりをしました。ロシアの田舎手料理を毎日堪能し、現地の風習に従いウォッカやビールでのどを潤し疲れを取りました。当然、風呂もなく、外で手押しポンプでさびが混ざった井戸水をくみ上げて行水したり、村民のロシア式サウナをお借りして、原始的な生活を満喫しました。同行してくれたロシア人研究者もあまり英語が話せず、中野先生にも教えていただきながら挨拶や買い物程度ができるロシア語を3週間で覚え、調査結果を携えて無事帰国しました。今回は、幸運にも得られた成果を論文としてまとめることができましたが、大切なのは、この3週間の出来事一つ一つが、五感を通じて私の身体に深く刻み込まれている点だと信じています。

今振り返ってみますと、この現地調査が私の人生にとっての岐路となりました。現在は、過去2年間赴任していたタイやベトナムなど東南アジアを中心に過去8年間で60回以上の渡航を通じ、海外との共同研究を行う機会に恵まれています。幸いにも、私が所属します東大生研は、伝統的に自由闊達に議論できる風土を持ちますし、私のような活動を積極的に支援してくれます。リモートセンシングが分野を超えた橋渡しの役割を期待されてから久しいですが、これまでもそしてこれからも真に重要性なのは、研究のための研究だけではなく、教育・研究を通じた国内外での社会貢献でありますし、これを実現できるように一層の努力を誓う次第です。最後に、私をこのような活動に導いてくれた安岡善文先生、今回ご推薦いただいた方々、普段私をサポートしてくれております皆様に感謝申し上げます。

2009年6月吉日 竹内渉